

S F の変容

ある文学ジャンルの詩学と歴史

ダルコ・スーヴィン

大橋洋一 訳



S F の変容

ある文学ジャンルの詩学と歴史

ダルコ・スーヴィン

大橋洋一 訳

国文社

訳者略歴

大橋洋一（おおはし よういち）

1953年生れ。1979年東京大学大学院人文科学研究科英語英文学修士課程修了。現在、学習院大学助教授。

〈訳書〉 T. イーグルトン『文学とは何か』（岩波書店）

同『批評の機能』（紀伊國屋書店）

同『批評の政治学』（平凡社、共訳）

F. ジェイムソン『政治的無意識』（平凡社）

B. ジョンソン『差異の世界』（紀伊國屋書店、共訳）

P. バリンダー『SF／稼動する白昼夢』（勁草書房、共訳）

他

S Fの変容

——ある文学ジャンルの詩学と歴史

1991年3月25日 初版第1刷発行

著 者 ダルコ・スーヴィン

訳 者 大橋洋一

発行者 前島 徹

発行所 国文社

東京都豊島区南池袋1-17-3（〒171）

電話03(3987)2865 振替東京8-195058

印刷 新栄堂／製本 石津製本

S F の変容

ある文学ジャンルの詩学と歴史

ダルコ・スーヴィン

大橋洋一 訳

国文社

METAMORPHOSES OF SCIENCE FICTION

by Darko Suvin

Copyright © 1979 by Yale University Press, New Haven & London

This Japanese edition is published in 1991

by Kokubun-Sha Publishers, Tokyo

by arrangement with Yale University Press, New Haven & London
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

目次

日本語版への序 5

序 19

謝辞 32

第一部 詩学 35

第一章 異化と認識 37

第二章 SFとジャンルのジャングル 52

第三章 文学ジャンルとしてみたユートピアの定義——歴史的意味論、系譜学、提案、そして擁護

第四章 SFとヘノーヴム 115

第二部 歴史 143

旧SFの歴史への序 145

第五章 オールタナティヴとしての島 150

第六章 未来予測への移行——ラディカルな狂躁とロマン主義的反動 187

第七章 リベラリズムが未来予測を沈黙させる——空間拘束機械 232

第八章 燦然たる暁の時を待ちながら——夢、ヴィジョン、あるいは悪夢？

新SFの歴史への序 320

第九章 SFの伝統における転換点としてのウェルズ 324

第十章 『タイム・マシン』対『ユートピア』——SFの構造モデルを求めて 344

第十一章 ロシアSFとそのユートピアの伝統 371

第十二章 カレル・チャペック、あるいは私たちのなかのエイリアン 420

原注 439

訳者あとがき 471

文献 505

索引 518

0 本書の内容を最初に思いつき、構想を練ったのは一九五〇年代と六〇年代のユーゴスラヴィアにおいてである。それを現在のかたちにとめたのは一九七〇年代の北アメリカと英国においてである。と、これだけいえば、この間の時空間の実存的・イデオロギー的コンテクストにかなり精通しておられる方にとって、本書の輪郭をなす要素についてあらかじめ説明したことになるかもしれない。けれども、その理由をいちいち語れば長くなるし、八〇年代のせっかちな読者に対し、そのくどい話に最後までつきあえと要求するのにも酷かもしれない。とはいえ、どのような本も、思いつくかぎり最良の自己弁護はすべきである。それゆえ私の日本の読者に対するこの短い〈へ序〉のなかでは、橋渡しの説明の要ありと思われることがらを、二つだけ選んで語らせてもらうことにしよう。平行関係、差異、そして空間的なものから時間的なものへの移行、最終的にあらわれる時空間的な想像力などを、本書はおもなテーマのひとつにしている。そこで、これから語ろうとする二つのことがらも、本書の原稿が完成した一九七七年から一九八七年への時間の移行とそのあいだの空白に関係することとなる（もちろん一九八七年もまた、イデオロギー空間のなかでは移行＝通過地域にあたる）。と同時に、それらはまた、英語圏から日本語圏の読者へという地政学空間の移行とも関係しよう（もちろん、この移行にしても、時間的移行であることはいうまでもない。いくらジェット機が発達によって地球が狭くなったとはいえ、私たちはこの地球で共時的な生き方をしていくわけではない。それに私のみるところ、日本は、ヨーロッパの社会・時間に換算すると、十六世紀と十九世紀と二十一世紀とを魅力的に、また挑発的に混在させているのだから）。

もつとも、二か月たらず日本に滞在したからといって、この私に日本についてなにかを語る資格などあらうはずもない。けれども私があえて語ろうするのは、中国の古典でいうところの夷狄、また日本語のなかでもひととき豊かなイメージをもつ空間的メタファー（地理的なそれではないにせよ）でいうところの《ガイジン》（外人）の、要するにアウトサイダーの、崇高なる無知のなせるわざと考えていただくほかはない。外側に立つ人間であるアウトサイダーはえてしてこんな幻影を思いえがくものだ。もしアウトサイダーたる者、共感とふかい関心を失わず、しかも、ただ無批判にものごとを受けいれたりしないならば、インサイダーには、あまりになじみぶかいがゆえに、かえって見えていないヴィジョンの真の意味を発見することになるかもしれない、と。ヘーゲルが私たちに教えてくれたように、知られている（bekannt）ものは、かならずしも、認識されている、つまり正しく理解されている（erkennt）ものとはかぎらない。現に、日本のメガロポリスとシリコン・チップのテクノロジーの、わくわくさせるような裏面を、疎外生活の新しいモデルのためのメタファーとして今日利用しつつあるのは、ほかでもないアメリカの興味をそえられる新種のSF（スター・ウォーズ計画）時代のSFにおける仮借なき粗製乱造の不毛な狂乱のなかで、フェミニズムSFを除けば唯一興味をそえられる新種のSF）、ありていにいえば、ギブスンとその仲間たちのサイバー・パンクSFなのだから。また、日本はただだんに、私の人生経験における驚異と喜びにみちた国、また、これまでにすでに知己を得た親友たちやすぐれた同僚たちの住む、私にとっては個人的に——いやお望みなら心底という——きわめて現実的な国のひとつであるというにとどまらない（ここという日本とは、なにも奈良の寺院のことをいうのではなく、東京の裏通り、たとえば西早稲田界隈と、そこで出会う人びとをも指している）。と同時に日本は、文楽、『源氏物語』、北斎の浮世絵『富嶽三十六景』、そしてきわめて精妙な日本語によって頂点をきわめる独自の伝統をもつ国である。この種の文化伝統を、私がこれからさきマスターする望みはないが、しかしそれでもショート・ストーリー（残念ながらSFではなく、寓話だが）の作者であ

るのみならず、俳句、短歌、旋頭歌の作者でもあるという、私のもうひとつの隠れた経歴のなかで、この日本の伝統を研究し、使いこなすこと——たぶん、悪用になるうが——を、私はいまも心がけている。こうしたことすべて踏まえたうえで、以下の考察ではSFとテクノロジーの関係、ならびにSFと政治の関係の二点にまとを絞ることになろう。

1 「価値自由」ブルジョワ科学の怖るべき成果を最初に体験したのは日本である。すなわち広島と長崎において。また、美しい国土の汚染と環境破壊というかたちで、いまそれを再度体験しているのも、人類の文化の指標といえるものを数多くおびている国、しかも他のなににもまして温厚で忍耐強く寛容で——しばしばあまりに寛容で——才能にめぐまれ、そしてすべてを考慮すれば賛嘆しないではいられない民族の国、すなわち日本なのだ。(私はここで、たとえば日本では学校をはじめとする怖るべき社会的圧力によって、ほとんどの男性が大企業の忠実な下僕へと、洗脳されるといったことを論ずるのはやめておこう。私が日本に対する批評家としてではなく、日本を愛する者としてしばらくのあいだ話をするのを、どうか許していただきたい。)さて、ブルジョワ科学が「価値自由」を金科玉条にしているからには、私のこの本を書評した(ブルジョワ的なもしくはリベラルな)批評家たちの多くが、芸術一般ならびに個別的にはSFに対する私の立場をあまりに道徳的で、規範的だと感じたのもむべなるかなといわねばならない。とはいえ私は本書を道徳的なものとは考えていない。本書が語っていることは、芸術とは人びとのあいだのさまざまな関係を包みこむような地平から生まれでて、そして最後には(どんな批評家でも無視できない多くの重要な媒介物によって)その地平にふたたび戻るということだけなのだ。そして、もし芸術がその意義に応じて、いま述べたような関係を明らかにし、それらを理解しやすいものにするならば、かならずや、芸術は人生をもっと明るいものにするということ——本書でいわんとして——はこれにつきる。いま述べたことを私は事実以外の何物でもないと思う。ただし、このように語るとは、現実存在する芸術作品を判断するとき基準と

して仰がねばならない潜在的可能性をもうけたことにもなるのだから、そのかぎりでは、私の主張は規範的ということにもなるうか。けれども、私の信ずるところでは、規範の本質とは、さまざまな議論に開かれていくということなのだ。もしどうしてもその規範にレッテルが必要というのなら、私の立場は新マルクス主義であるとしておこう。読者諸氏のそれは、私のそれよりも、明確ではないかもしれないし、私とは立場を異にするかもしれない。しかし、自分にはそのような立場などいっさいないといひ張ることは、私にはなほだ滑稽に思えるし、それはふかい自己疎外のあかしのように思われる。人生は、選択をとおして先へ進むしかない。そして私たち人間（ホモ・サピエンス）にとって、選択とはまた責任のことなのだ。

ところで、先ほどの議論をつづければ、広島や今日の物理的汚染につながるテクノロジーを私たちは捨てるべきだということになるのだろうか。かならずしもそうではあるまい。もちろん、分子工学や、私たちの金融取引に介入するコンピュータの怖るべき可能性（これにくらべれば、ゲシュタボやベルセン収容所の医師たちのおこなったことなど子ども騙しだ）を、合理的にコントロールしなければならぬこと、狂気の軍国主義者や、資本主義制のなかで利権争奪に汲々としている者たちを自由にのさばらせてならないことはいうまでもない。純粋に数学化され、量化され、価値自由的な、非一質的な科学概念を、私たちは断固として棄却せねばならない。もちろんだからといって、私たちは中世へと、つまり魔術と錬金術の時代にもどれということではないし、またもどろうにもそれはできっこない。私自身としても、水洗トイレや電気や天然痘ワクチンさらには電話や飛行機のない世界で暮らすのはごめん（もし飛行機や電話がなければ、私はどうやって、日本にやってくるのかができるのか、どうやって、日本にいる私の親友たちに海のむこうから話しかけることができるのか）。しかし揶揄の対象となる「質的科学」から私たちはまた、自分たちが地球の主人ではなく地球の管理人であることを学んでいる。地球にあまり負担をかけすぎると、それは最後には私たちに歯向かってくるかもしれない（いやすでに、新しい疾病、オゾン層の破壊、アフリカの干魃などのな

かに、私たちは危険な徴候を読みとっている。私たちは人類全体のために、この惑星をあずかっている。ここでいう人類全体とは、現在権力をもたない民族や階級（世界を支える四頭の鯨、すなわち、女性、労働者、恋人たち、学ぶ者たち）はいずれまでもなく、さらに過去と未来の世代のことも意味している。このような世界のなかで、私たちの存在の妥当性について（たとえ虚構^{シムラ}という、遠回りで、まわりくどい、たとえ話という方法を使っても）語ることでできないエクリチュールは、この世界のなかで妥当性を欠くときはいやうがない。世界について、また世界に対して語りかけるようなエクリチュールをものすることは、ある意味で、精神衛生にもよい鍛練である。また、そのようなエクリチュールこそ、人間を解放する認識をもたらす主張にはかならないと私は考える。そして、認識すなわち真の理解だけが、私たちをヒト科の種の知的政治に導くものなのだ。ここでいう政治は、議会政治の愚劣な党利党略とはなんら関係はない。そうではなくて、ここでいう政治とは、古代ギリシア（そして中国あるいは日本）において用いられたような、『《ポリス》すなわち共同体』に、共同体の病いあるいは健康にかかわることなのだ。私にとってマルクスは、ジェファースンのみならずアリストテレスや孔子にも通ずる面をもっている（彼らはみな、真正の保守主義をただやみくもに否定するのではなく、その肯定的な面を弁証法的に統合しようとしていた）。しかも彼らはみなひとしく、次のことに關してだけは意見の一致をみていたはずだ。すなわち（古代ローマ人の諺に曰く）*salus rei publicae suprema lex* 政「治的肉」体の救済こそ、至高の掟なり、と。私は芸術に（いわずやSFに）くそ真面目なお説教などまったく期待していないが、かといって、SFなど山手線や新幹線の車内でただ読みふけるためのだけの、毒にも薬にもならない逃避の場を提供するものだとも思っていない。だから私は性懲りもなくこう主張しないではいられないのだ、SF批評においても、価値観に左右されない記述などありえないというのが本書の立場なのだ、と。いや、あなたは価値観に左右されない記述もあるのだ、いい張るかもしれない。しかしそれはただたんに、あなたが前提としている自分の価値観について論ずるの

を嫌がっているだけなのだ。そのようなためらいは、知を求める者にとってはなんの意味もないと、ここではつきりいつておこう。

さてそうなると思える、SFに對しとるべきアプローチが問題になる。この問題に對する答えとして、すこしは役にたとうかと思ひここに用意したのは、以前私がおこなったスピーチである。かつて私は「SF研究協会」から「ヘプリングリム賞」を授与されたことがある。そのときにおこなった受賞スピーチをそのままここに転載させていただいて私の考えの一端を披露したい――

はじめてヴェルヌを読み、ウェルズを読み、トマス・モアを読み、そして、戦後のユーゴスラヴィアで回し読みされたグロフ・コンクリンのアンソロジーに接して以来、わたくしは社会主義者として、SFの「それはかならずしもそうじゃない」という面につよく惹かれてきました――したがって、わたくしにとって、SFはガーンズバックやヴェルヌや、さらにはシェリーではじまるものではなく、へ地上樂園」という世界にあまねく存在する伝説、そして、知へのプロメテウスのあくなき欲求、むろんこの知は、私たちのこの「地球」における節度ある幸福と仲むつまじく結びつけられるべきものですが、そうした欲求とともに、はじまったと申せましょうか。もちろん、SFというからには、当然、ラディカルに新しいもろもろの人間関係を、アナロジを媒介にしてあつかう物語形式すべてをふくむことは申し上げるまでもありません――いま人間関係を申しましたが、自分自身を見るために複雑な光学なシステムを必要とするという理由で、ラディカルに新しい人間関係は、別の世界や別の生物へ異化されることが多いものの、たとえどんなに異化されていても、それが人間関係であることに変わりはありません。また、あらゆるSFは、いまここにいる読者との対話であるということも念頭におくとすれば、読者が知っているよりもラディカルに悪化した関係をあつかうあらゆる物語も、SFにふくまれると申せまし

よう。なぜなら、このような物語に対する彼／彼女の反応は——マイナス掛けるマイナスがプラスになるという法則、いいかえるなら否定の否定という法則によって——そうした物語の地獄の新地図を肯定的なヴィジョンを示すものに、すなわちSFに変えるからです。

わたくし自身のSF批評をふりかえてみますと、自分で論じている物語形式のなかにバックボーンとしてあるそうした対抗的な異議申し立ての要素を、自分の書いているもののなかに真似して取りいれようとしているところがあるといわねばなりません。私がまず異議を申し立てようと思ったのは、「歴史なんて屑だ」という例のヘンリー・フォードの言葉でした。たとえ埋れたものではあっても、過去の生き生きとした伝統を理解しないかぎり、現時点で容認可能な未来へと進化するチャンスを示すことはできないはずですが、これを読者に納得してもらおうと私は努めました。それからもうひとり、名前は忘れてしまったのですが、さきほどのフォードに劣らず名の知れたある著者が「SFとは、私が指し示した本のことをいうのだ」と語ったことにも異議を申し立てようと思いました。SFについて一般的な見解を述べるさいには、かたいつぼうで経験的な証拠を考え、もういっぼうでは論理的にも社会歴史的にも申しぶんのないSFの概念なり概念の体系なりを考え、その両者をつきあわせて折りあいをつけねばならないこと、これを読者にも納得してもらいたかったのです。それに忘れてはなりません、いっぼうでSFとはテクノロジーの進歩／破綻を歌いあげるものであるという決めつけが大手をふってまかりとおっているかと思えば、もういっぼうではSFとは、その薄っぺらな変装のしたに人間・プラス・宇宙についての永遠かつ神話的な真実を表現しようとしているといった決めつけもよくおこなわれ、それらはまるで双子のようにオーソドックスなSF観の二極を形成しています。これに対しても私は異議を申し立てたつもりです。歴史と社会は、虚構作品をとりまくたんなるコンテクストではなく、作品の内側に組み込まれた要因であって、たとえていうなら川べりが川そのものをかたちづくるように、あるいは

文字と文字との空白が文字そのものをつくりあげているように、作品と密接な関係を保ちつつ作品そのものをつくりあげるものであることを、多少なりとも体系的に語ったつもりです。最後に——おそらく他のすべての立場にもあてはまる訴えとして——わたくしはまず、アカデミックなエリート主義にも異議を申し立てました。大衆芸術や大衆文学とみるや、眉をひそめおたかくとまっしてしまいうアカデミズムのエリート主義ほど、愚劣で鼻もちならぬものはありません。と同時に返す刀で、わたくしは熱狂的なSFファンの立場にも異議を申し立てました。SFファンはかぎりなく広い大洋をゆく幸福な航海者のごときもので、もう見境もなく、毎年毎年大傑作が次から次へと生まれる奇跡の大陸にいたる航路をすぐに発見してしまうのですから。

ただし、こうした問題はあるにせよ、それでもやはりSFとは「それはかならずしもそうじゃない」ということを、そしてさらにいうなら「ものごとには別の面もあるのだ」ということを、語りかけてくれるものです。SFは好戦的に挑みかかるだけでなく、(すくなくとも、全体を見わたせば)輝かしきヴィジョンを勝ち誇って示すものでもあるのです。そこで、わたくしは(唯物論者にふさわしく)まず手の届くところにあるSFに学び、SFとSF批評について、肯定的たらんと努め、その輝けるヴィジョンを示そうとしてみました。そして、私たちの相互に関連しあった存在様式に照明をあたえるのに役につく作品群についてなにか実のあることを語ろうとしてみました。モアについて、シラノについて、モリスについて、ウェルズについて、ザミヤーチンについて、わたくしは語ろうとしました。いえ、彼らだけではありません。チャベック、ディック、ル・グイン、ストルガツキー兄弟、レムについても、わたくしは語ろうとしました。とはいえ、わたくしが自分の書いたもののなかではたして成功しているか否か、あるいは、いくつかの本、またとりわけ『サイエンス・フィクション・スタディーズ』誌を(デイル・マレン、ロバート・フィルマス、マルク・アンジュノそしてチャールズ・エルキンズと)編

集したとき、はたして成功しているか否かは、みなさまがたの御判断にゆだねたいと思います。

2 しかし、そのとき、好意的でまた中庸の立場をとる私の友人の何人かが、質問に立ったことを覚えて
いる。もし、私がSFとはこれこれしかじかのことをすべきものだと思えるなら、なぜ、現代の重要なSF
をあつかわないのか。なぜ、SFの理論と旧時代のSF史だけで本書を閉じてしまったのか、と。この正鵠
を射た質問に対して、私は二つの答えを用意している。まず第一に、現在という時は、共時的（理論的）パ
ースペクティヴと通時的（歴史的）パースペクティヴという二重のパースペクティヴなくして理解などでき
ないということである。本書は、そのような二重のパースペクティヴを、将来の仕事のために提供しようと
したもののなのだ。第二に、私たちは誰でも、時間、金銭、共感の念その他にどうしても限界がある。本書で
私は、自分で自由に使える手段を最大限利用して、できるかぎりのことをしたまでである。たださいわい、
私の同僚たちの何人かが、またとりわけ『サイエンス・フィクション・スタディーズ』誌の協力者の多く
（とはいえ彼らにかぎるということではない）が、私の示したいくつかの道具を彼ら自身の仕事のなかでも
使ってくれていることがわかり自分ではうれしく思っている。さらにいうなら本書が出版された一九七九年
以降、私は二つの本を上梓した。それはいずれも本書で示した地平を応用するだけでなく、その地平にもと
づいて築きあげられた重要な成果だと私は信じている。

最初の本は、*Victorian SF in the UK: The Discourse of Knowledge and of Power*の出版はG. K. Hall
& Co (Boston, 1983)。この五百ページにならんとする大冊は、一八四八年から一九〇〇年のあいだに英国
で出版されたSFすべてに照明をあてたもので、約四百点の文献に関する注解つき文献目録を示したあと、
その著者のほとんどを特定するよう努めている。そして最後に、それに関係する社会的ディスクリールをめぐ
る長い研究論文が収められている。社会的ディスクリールとは、これらのテキストのなかで、誰が（どの社会

集団が）誰に対して、いかなる価値観から、いかなるイデオロギー的目的から、語っているかを、問題とするものだが、こうした社会的ディスクール——私はそれを「権力」と「知」の二極構造のなかに位置づけた——に参加しているものとして、十九世紀の英国のSFを読むのが、おそらくもっとも有益な読み方であろう。この本は、こうして、前著のなかに具体的な制度的議論が欠けているのを、性急の感なきにしもあらずだが、しかし正しく批判してくれた批評家たち（おもに左翼の批評家たち）の不满に部分的に答えるものとなっている。しかし、それは、あくまでも枠組となる概観を設定するにとどまるものであり、完璧で詳細な歴史書をもくろんでいるわけではなかった（完璧な歴史書は、ひとりの知ったかぶりの生意気な人間の手によって書かれるものではなく、必要条件を、それも今日まだ存在していない財政的その他の条件を満たしたチームによって、いずれは書かれるはずである）。

私がいちばん書いているときに、二番目の本がマクミラン社（London, 1987）から出版されることになっている（「実際には一九八八年に出版された」）。*Positions and Presuppositions in SF* という題されたそれは、本書と平行して、また本書以後に書かれた私の論文を集めたものとなっている。そこでは、まずSF理論のその後の展開をあつかい、とりわけ、あらゆるSF物語形式は、作者の属する世界における諸関係に関する拡張されたメタファーであり寓話であるというテーゼに焦点を絞る。また、さらに、現代の作家たち（レム・ディック、ル・グイン、エフレモフ、ストルガツキー兄弟、ブラウン夫妻〔旧東ドイツの作家、ギュンター（一九二八）とヨハンナ（一九一九）〕、C・スミス）を論ずるとともに、あわせて、SF批評やSF教育における重要な問題にも触れることになる。

したがって本書以後の私の二冊の本は、私の考えるSFへのありうべきアプローチについて、さらにくわしく実例を示しながら説明するものとなっている。もちろん、もし私たちが理想的な世界に生きているのなら、この二冊も——またそこにはおさめることのできなかつた、ワインボームやユートピアに関する私の論